

■ 全教員で取り組むが成果確認は担任が行う 無印 担任が取り組む		短期経営目標	具体的な方策	評価指標	達成状況		分析	改善策	学校関係者評価
学校教育目標	中期経営目標 (カウコの数字 は経営方針の 番号)				中間評価	最終評価			
					か し く	○教員の 資質 向上 (②)			
B 身に付いた児童が70%以上80%未満									
C 身に付いた児童が70%未満									
○漢字・計算練習について、小テストなどで合格基準を設定したうえで成果確認をし、結果に応じて家庭学習をさせるなど、繰り返し練習させる。 ○朝学習の時間、家庭学習等の機会に、前学年までに配当されている漢字の読み書き、計算の復習も取り入れる。 ○漢字指導の際、成り立ちや使い方、関連して一度に覚えた方がよいものについて教師が意識的に指導し、漢字学習への興味を高めさせる。	A 自分の考えを音声言語として伝えられる児童が80%以上	B	B	先生74% 児童78%		・学年当初から比べると、相手意識をもった発言や聞き方ができる児童が増えてはきたが、「慣れ」からか注意散漫になってしまうことがある。 ・MY詩発表会などを通して、受容する聞き方ができるようになったが、それがその他の授業の生活の場まで活用されてはいない。	・話型や聞き方の形式的な指導とともに、「自分の考えを発表したい」「友達の意見を聞きたい」という場面を、授業・朝の会・帰りの会などで意識的に作っていく。	先日の展覧会では、高学年児童が子供学芸員として説明してくれたが、用意した原稿に加えて「ぼくはこう思います」という自分の感想を述べていて感心した。	
	B 自分の考えを音声言語として伝えられる児童が60%以上80%未満								
	C 自分の考えを音声言語として伝えられる児童が60%未満								
○学年配当の漢字の読み書きと基本的な計算の仕方を身に付けた児童を育成する。	A クラスの90%が成果確認問題の合格基準の8割を達成	C	C	漢字66% 算数67%		・まちがえた原因を自ら探り、見直す習慣が付いてきた児童はごくわずかである。多くは、指摘されたミスを放置し、促されないと直すことができない。 ・ただ漠然と漢字を書いている。言葉として定着していない。 ・計算などの反復練習の成果が出てきている面もあり、児童自ら伸びたと実感できている部分もある。	・反復練習の徹底だけではなく、学習する意義ややってよかったと実感できるような場面を意識的に取り入れて、学習に対する意欲を高めていくようにする。 ・見直すポイントなどを常時掲示して、子供たちが自ら振り返る手段をもたせる。 ・基礎基本的な事項だけでなく、考えて追及する楽しさや、最後まで取り組み続ける力を付ける方策を学校全体で考え共有する。	学習意欲を高め、持続させるには、やはり日常の授業においても工夫が必要であると思う。児童が興味・関心をもって取り組めるような工夫を盛り込んでほしい。	
	B クラスの70%以上90%未満が成果確認問題の合格基準の8割を達成								
	C 成果確認問題の合格基準の8割を達成した児童が70%未満								
や さ し く	○人権教育の充実 (①)  ○道徳教育の充実 (⑤)	④■仲間外れや相手の嫌がる言葉遣いなどのいじめをしない児童を育成する。 ○年3回「いじめアンケート」を実施し、聞き取りを丁寧に行い、全職員で予防策・早期発見に努める。 ○人権月間に、ビデオ・DVD教材を活用し、自分や他の命を大切にしようとする児童の態度を育む。 ○5年生全員とスクールカウンセラーの面談を実施し、可能な限り給食交流も行う。 ○毎学期の担任との全員面接の際には、交友関係についても丁寧に聞き、いじめにつながるような案件には早期対応を心掛ける。	A 把握から一定の解決まで3週間以上かかっている案件が0	B	C	・学級担任と、学年相互や管理職・スマイリースタッフやスクールカウンセラーとの連携はとれているが、いじめ防止対策委員会の定例会は見直す必要がある。 ・担任による全員面接は、児童のトラブルの早期発見や解決に繋がる有効な手段であった。 ・状況や感情を言葉で伝えることができないため、けんかやトラブルに発展してしまうケースが多い。	・生活指導部・いじめ防止対策委員会を中心に、今後も様々な立場で連携して学校全体で児童の指導に当たっていく。 ・生活指導部だけでなく、教員の一人一人が児童の様子を日々観察し、安心して学習できる学級・専科経営をしていく。	市内中学校では「いじめ防止対策委員会」が立ち上げられている。本校は“学校いじめ防止基本方針”をもとに、通常は校内推進組織による定例会を行い、重大事態が発生した際は地域と連携していくことが確認できた。	
			B 把握から一定の解決まで3週間以上かかっている案件が3件未満						
			C 把握から一定の解決まで3週間以上かかっている案件が3件以上						
	⑤■自分を大切にし、自分に自信がもてる児童を育成する。	A 自己受容評価1点台の児童が全校児童の10%未満	/	A	3%	・年度当初の自尊感情調査(3年以上)では、1点台の児童が各クラスで複数名いた。これは、特に3年・5年はクラス編成替え直後だったこともあり、年度初めの児童の不安がそのまま表れたと考えられる。年度末の調査でそれが大幅に減った。様々な行事やクラスレク、長なわ大会などを通して、クラスへの所属意識が高まった。児童一人一人が、クラス・クラブや委員会・たてわり班活動などで自分の役割があった、役に立ったと感じることができたのだと思われる。	・今後も担任による全員面接を続けていき、児童の長所を直接伝えて自身をもたせていく。 ・教室での様子や授業中の発言には、価値付けをするような褒め言葉を用いて、自己肯定感を高めていく。 ・特に高学年は一人一人に全校に関わる様々な役割を与え、実行させ、きちんと評価して自己肯定感を高めていく。	本校児童の自尊感情は比較的高い傾向にあるという説明だが、日頃から地域で見守られているという安心感もあるからではないか。	
		B 自己受容評価1点台の児童が10%以上15%未満							
		C 自己受容評価1点台の児童が15%以上							
⑥■すれ違った先生や外部の方に、場に応じた(明るく元気に・一度あいさつした人)には黙礼など)挨拶ができる児童を育成する。	A 90%以上の児童が身に付いている	C	B	先生76% 児童94%	・学級でのあいさつは児童の安心感からか声がよく出ていて気持ちが良い場面が多い。 ・校長講話や学級指導の後などでは、廊下ですれ違う際のあいさつや会話が出来る児童が増えた。ただし、定着することは難しい。	・七小の児童は「打てば響く」素直さがあるので、指導が確実に効果を発揮することが分かった。今後も、生活指導の重点として各月には改めて意識させる等の指導をしていく。	(見守り会)低学年はきちんと挨拶出来て、高学年は頭を下げる程度の子もいる。目を見て挨拶できるようにしたい。挨拶は社会人としての基本である。活動も5年目、通勤の大人も挨拶する地域になってきた。引き続き学校でも繰り返し指導してほしい。		
	B 80%以上90%未満の児童が身に付いている								
	C 身に付いている児童が80%未満								
げ ん き よ く	○心と体の健康教育の充実 (③)	⑦基礎的な体力の向上に努める児童を育成する。 ○毎日の外遊びを励行するとともに、元気アップタイム、短縄月間の取り組みを充実させる。 ○東京都の体力テストの結果を分析し、とくに苦手な種目について、特化した改善への取り組みを実施する。	A 元気アップタイムや短縄月間の取り組みに意欲的に取り組んでいる児童が90%以上	B	B	先生87% 児童90%	・2学期の短なわ月間、3学期の長なわ月間など、設定されたときには率先して外に出て体を動かしている。 ・特に上学年では、新しい器具(例えばリングビーなど)を用いて、外部指導員を招聘して運動に対する興味関心を高めたり、オリパライベントとしてコーディネーション・トレーニングの講師と一人一人が体を動かすことの楽しさを味わうことができた。	・真夏の猛暑や真冬の寒さ、強風の時などは考慮が必要だが、学校全体のイベントは確実に子供たちの意欲を喚起しているため、今後も続けていく。 ・地域の方や外部の方の指導は子供たちだけでなく教員にも刺激になるので、できるだけ招聘する機会を増やしていく。	(PTA)東京女子体育大学の体操・短距離走等の選手を招き、運動の楽しさに触れる行事を開催するなど、体力向上を支援している。
			B 元気アップタイムや短縄月間の取り組みに意欲的に取り組んでいる児童が70%以上90%未満						
			C 元気アップタイムや短縄月間の取り組みに意欲的に取り組んでいる児童が70%未満						
⑧■好き嫌いをしないで給食を食べる児童を育成する。	A 給食を自分で食べることができる量が調節し、完食する児童が80%以上	A	A	85%	・学年後半になって、明らかに食べる量が増えてきた。その学年に配当される量に慣れてきたと考えられる。 ・配膳されたものはしっかりと食べきる児童が増えた。 ・苦手なものについては自分で量を決め、努力している姿が定着した。 ・自分で量を定める際に、野菜類を少なめにする児童が多いことは課題である。	・食べる量やマナー、給食時間の過ごし方など、七小としてのルールを再確認し、どの学級でも同じ指導が行き渡るように「スタンダード」として定着させていく。	(PTA)給食ができるまでを取材し、DVDにまとめ、市内産野菜の活用状況を知らせたり、献立の苦勞を伝えたりしている。“食べさせるのが目的”ではないと思うので、児童が「楽しく食べる」給食の指導をしてほしい。		
	B 給食を自分で食べることができる量が調節し、完食する児童が70%以上80%未満								
	C 給食を自分で食べることができる量が調節し、完食する児童が70%未満								

